



「人と自然」(Humanity and Nature)は、まさに地球研の英文名称ですが、人と自然の関係をどう考えるべきか。私たちにとっての大きな課題です。

6月初め、パリで、地理学者・哲学者のオーギュスタン・ベルク(Augustin Berque)さん(昨年度の地球研客員教授)のおられるフランス国立社会科学高等研究院(EHESS)と地球研・京都大学それにUNESCOが共催で“Does Nature Think?”(自然は考えるか?)というちょっと奇妙なタイトルの小さなシンポジウムを開催しました。地球環境問題では、ともすれば、人間のための自然はどうあるべきか、という視点が強調されますが、そのような見方でいいのか?むしろ、(人間以外の)生きものは何を考えているのか(考えていないのか)、人間はその場合、どういう位置にあるのか、という逆の発想を試みようというベルクさんの発案で企画されました。少し時間が経ってしまいましたが、私なりの感想も含めたやや長めのご報告です。

まず1日目の冒頭、ベルクさんが、(人間以外の)自然は「進化(evolution)」を(どう)考えているのか?という問題提起をおこないました。彼は和辻哲郎の「風土論」を批判的に発展させて、人の自然の間には、双方向に影響し合った通態性的関係(trajectiveness)にもとづいて、地球上のあらゆる地域の風土が形成されているという論を展開しています。風土は20世紀初頭のドイツの生物学者フォン・ユクスキュルの(それぞれの生物は、同じ場に居ても異なる環境を感じているとする)「環世界」の概念と通じています。シンポジウムに参加されていた動物行動学の山極壽一さん(京大総長)は、通態的關係を「どんな生物であっても、その環境に主体的に関わることによって環境を取り込み、同時に環境に取り込まれている。人間にとって、それは風土であり、生物にとっては環世界である(山極、2019)。」とうまく説明しています。生態学者今西錦司が晩年に主張していた「環境の主体化」あるいは「主体の環境化」とも共通の観点になります。その論からは当然、人間だけがこの地球の主人公ではなく、自然を形成する「生きとし生けるもの」すべてにそれぞれの「主体性」を持って存在しているという視点がでてきます。それぞれの生物(種)は、したがって、単に生き残るため、ということではなく、何らかの意味で、自分たち自身の自己認識(self-representation)を持って生きているのではないか。生物(種)の時間的发展としての「進化」とは、主体性を持ちながら、他の生物あるいは変化する環境との(偶然的あるいは必然的な)遭遇の過程で、通態的に変わっていくこと、と私なりに解釈しました。(この議論は、彼の新著「地球の詩学(Poetics of the Earth)」(Berque, 2019)で詳しく議論されています。

2日目には、東洋哲学にも造詣の深い米国の哲学者マラルド(John C Maraldo)さんが、「自然は私たちの外にあるのか、内にあるのか?」というもうひとつの基調講演をされました(Maraldo, 2019)。私なりに解釈した講演要旨は以下の通りです。

20世紀後半以降の(地球)環境問題は、人間が自然を大きく変えていった。言い換えれば、(人間以外の)自然は、人間の活動に応答して、大きく変わっていった。「自然の考え」とは、この応答に現れていることになる。では、誰が(何が)自然を代弁できるのか?ただし、この(人間以外の)「自然」という概念は、そもそも西欧の近代思想にもとづくものである。自然とは、管理され、利用され、美的対象として楽しまれ、科学の対象として研究される、非人間(non-human)の世界として考えられてきた。人間(ホモサピエンス)あつての(非人間の)自然という、まさに二元論的な関係になっている。そして現在は、人新世(人類世)(The Anthropocene)といわれ、地球上には、もはや人間の手つかずの自然などはない、ともいわれる状況になってしまっているが、相変わらずこの二元論的構図で「どうすべきか」を考えている。

自然が「何を考えているのか？」という自然の知(intelligence) について真に理解するためには、結局のところ、自然を、人間も含めて、全体としてみるものが求められる。人間は考えることができる。その人間が自然の中にあるということは、(非人間の) 自然も人間と密接に相互作用しながら、共に生きているということである。哲学者西田幾多郎に倣うと、「自然は単に我々人間の外にあるということでもなく、我々の中にあるわけでもない。我々は自然の中に生きているが、自然も我々に反響する。」ということになる。 もちろん、「自然の中の人間」という見方が人間と(非人間の) 自然のあいだの緊張や敵対関係を必ずしも除外するわけではない。(現在の地球環境問題はまさに、そのような関係にある。) ただ、人間が(人間と非人間が一体となった) 自然のあり方を模索していく道は、なかなか困難な道である。 では、どのようにして(非人間の) 自然の意識や知を、人間は悟ることができるのだろうか。 マラルドさんは、これについて、「約 700 年前、日本の道元禅師は、すでにその答えを用意していた。」と述べて、講演を締めくくった。

幸い、このシンポジウムには、道元の仏教哲学を研究されている東京大学の頼住光子さんも「道元の自然観」(頼住、2019)について発表され、この「答え」についてのヒントを、道元の大著『正法眼蔵』の中の「山水経」を引用して示された、「水は、人間にとっては生き死にを左右する大切なものであるが、龍や魚にとっては住む処(宮殿や楼台)と見、(水を恐れる) 餓鬼にとっては猛火と見る。(中略) 水という同じ一つの対象を見ても、それを見る(感じる) さまざまな種類のものにとって、それぞれの水があることになるが、本水(ほんとうの水、あるいは、水の本質)などはないのである。」と。道元のこの指摘は、先にのべたフォン・ユクスキュルの「環世界」の概念と通じています。 そのうえで、「自然は、それぞれの「生」に即して具体的なものとして扱われるべきであり、また、自然は人間だけの自然ではなく、生きとしけるすべてのものにとってのものなのである。それぞれの主観の構図から眺められてはじめて、そのものとして存在する…(中略) ……みずからの生の様式に根ざした主観の構図をはなれて、存在そのものというものはない。」と道元の論をまとめられた(頼住、2014)。

現在の地球上の「環境問題」の理解には、実は、この道元の見方は非常に重要な気がします。では、「異なるもの同士の共通の主観というものがどうすれば持てるのか。」 大変むつかしい課題ですが、その解決の基本には、(地域—地球—宇宙という) 世界の時空の中で、生きものだけでなく、山や川といった無生物も含めた神羅万象すべてが、相互依存の関係で成り立っていることを「悟る」ことの大切さを道元は示唆していたようです。

私自身、どの程度、「悟る」ことができているのか。このシンポジウムでの私の発表も含めて、改めて報告したい。

参考文献：

Augustin Berque, 2019: Does nature think evolution? Discussion paper for the Symposium on “Does Nature Think?” (Paris, June 2019) Augustin Berque, 2019: Poetics of the earth? Natural history and human history. Routledge, 213pp.

John C. Maraldo, 2019: Is nature outside or within us? Some philosophical reflections. Discussion paper for the Symposium on “Does Nature Think?” (Paris, June 2019)

山極壽一、2019：人間だけが「考える」のか—自然が持つ主体性とは。朝日新聞(2019.8.8 朝刊) 科学季評

頼住光子、2019:道元の自然観. Discussion paper for the Symposium on “Does Nature Think?” (Paris, June 2019)

頼住光子、2014：正法眼蔵入門。角川ソフィア文庫。231pp